

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2016 年度第 2 回研究会（通算第 2 回目）

日時：2016 年 12 月 3 日（土）14:00-19:00, 12 月 4 日（日）9:30-13:30

場所：京都大学稲盛財団記念館 3 階 小会議室

出席者：鶴田格、石川博樹、安溪貴子、池上甲一、石山俊、大山修一、小松かおり、坂梨健太、佐藤千鶴子、佐藤靖明、末原達郎、杉村和彦、杉山祐子、深澤秀夫、松田正彦、村尾るみ子

発表 1：松田正彦（立命館大学）

「鳥瞰東南アジア農業、虫瞰ミャンマー農村：アフリカ農業革命によせて」

アフリカとの比較の下で東南アジア農業の特徴を確認し、アフリカの「在来農業革命」論と東南アジア農村から着想された「在地の技術」論（安藤）との類似や相違を論じた。東南アジアの農業形態は多様であるが、アフリカ大陸と対照させると「アジア稲作圏」としてのまとまりが際立つ。アジア稲作圏の生態的基盤はモンスーンによる多雨と肥沃な沖積平野にある。外来の技術を受け入れながら発展した東南アジアの稲作は商業化以降の歴史も長い。インド・中国の影響を受けて成立した稲作技術体系が存続しており、13 世紀後半に始まったコメの商品化は植民地期のデルタ開発に大きく後押しされた。近年では「緑の革命」型の近代的技術が、国家の強い政策実行力のもとで農村に普及した。在地の技術論では、農民の主体性を重視する点において在来農業革命論と通ずるが、近代技術との融合などのダイナミズムがより強調されている。この背景には、「伝統作物」と「近代作物」の対照が比較的明瞭であるアフリカと、主作物であるイネが「伝統作物」と「近代作物」の特徴を兼ね備える東南アジアの違いがある。つまりアジアの稲作が自給生産と商業生産の両側面を持ち、古くから外来技術を受容しつつ発展してきたことが在地の技術論へ反映していると考えた。報告の最後では、熱帯世界としてのアジア・アフリカで共通する特徴である「不確実性の大きさ」に注目し、アジアの具体的事例としてミャンマー中央乾燥平原における生業多様化の実態とその機能に関する研究成果を紹介した。

発表 2：深澤秀夫（AA 研）

「マダガスカルの一農村の三十年間に稲作をめぐり変わったこと・変わらないことー「生活」の中における新しい技術をめぐる取捨選択の論理ー」

- 1.)マダガスカルにおける「在来稲作」と総称されるもの自体も、過去一千年ほどの間に展開されてきた外来の稲作技術の受容過程から構成されている。
- 2.)三十年有余調査を続けてきたマダガスカル北西部の農村の稲作においては、住民たちが実践してきた<生活>総体の中で、新品種や新技術の取捨選択、あるいは旧品種や旧技術の取捨選択や呼び戻しが、個別世帯の中で絶えず行われてきている。

- 3.) 調査村に「緑の革命」と総称される新品種及び移植・湛水田造営などの新技術が導入されて四十年近くが経過した。現時点において、品種としての「緑の革命」の優位性は失われ、他の在来品種・新品種と同列の選択肢におさまった一方、湛水田造営や移植などの技術としての「緑の革命」は概ね受容され普及した。
- 4.) マダガスカル発祥の新しい稲作法として、フランス人神父が考案した SRI（稲集約栽培法）と日本の JICA が推進する PAPERiz（コメ生産性改良プロジェクト）が、現時点で併存・進行している。技術パッケージの一体性と普及法に曖昧な点のある SRI に比して、「個別農家経営」を技術パッケージ普及の基本に置く PAPERiz 農法は実行可能性が高く、今後マダガスカル全土における単収増加の有効な手段になるものと期待される。
- 5.) <生活>の視点からは、コメの増産に時間と労働を集約する志向の人びとが SRI 農法に、生活全体の中で収入を増大させる志向の人びとが PAPERiz に向かうものと予測される。

発表 3 : 大山修一（京大）

「人類の生きる術としての農業の宿命と未来：西アフリカのサヘル農業の現状から」

地球上の土壌を陸地にならすと、18cm の厚さにしかならないという。この土壌を使って、人類は農業や牧畜によって食料を生産している。2016 年現在の世界人口は 74 億人、2050 年には 108 億人にまで増えると予想されている。農業や牧畜による土地の使用は土壌の荒廃、つまり砂漠化の問題を引き起こす危険性がある。UNEP が報告する砂漠化の危険性が高い地域は北米、南米、中央アジア、アフリカのサヘル、黄土高原、オーストラリアをはじめ有数の穀倉地域に該当する。西アフリカのサヘル地域もそのひとつで、そこに居住するハウサの農耕民は、荒廃した耕作地に、屋敷地や都市から出たゴミを投入し、耕作地の生産力を維持または改善している。近年、農村の住民は現金収入の必要性もあり、大量の作物や家畜を市場に販売し、それらは都市へ運ばれ、消費されている。土壌の養分は作物や家畜という形に変え、都市で消費され、都市内部に蓄積している。地球上の人口も、都市の人口も今後、増加しつづけ、大量のゴミを都市の内部に蓄積している。農村の土壌の貧栄養化と都市の富栄養化がすすんでいるが、ハウサの農耕民が毎日、屋敷地や土地から出たゴミを耕作地に投入している営みから、われわれは学ぶべきことがあるのではないだろうか。

発表 4 : 加藤 太（日大）

「タンザニアにおける在来稲作の地理的分布と農牧民スクマの移住による移植稲作の拡大」

東アフリカに位置するタンザニア連合共和国はアフリカ有数の稲作国である。本研究では、タンザニアの主なコメ産地で営まれる在来稲作の技術を調査するとともに、これらの稲作技術の地理的分布を明らかにした。

調査の結果から、タンザニア北西部に位置する産地では、畦を造成し表面流去水を利用

しながら移植を行う稲作が、中南部の産地では畦を造成せず河川の氾濫を利用しながら直播を行う稲作が営まれていることがわかった。こうした稲作の違いは北部と中部の地形的な差に起因していると考えられる。タンザニア北西部は緩やかな起伏のある高原が広がっており、雨水はわずかな凹地を伝いながらゆっくりと地表面を流れている。このような水の流路には畦で囲まれた水田がつくられ、その畦は表面流去水の流亡を抑えて水田内の水位を高く保つ機能をもっている。

一方、畦を立てずに河川の洪水に依存する稲作は、中南部の安定した水脈をもつ地域で広く見られる。このタイプの稲作は、氾濫原や河川沿いに分布するが、平坦地を流れる河川の流域には地下に砂層をもつことが多い。そうした場所では畦を立てても漏水してしまって水を溜める効果が低いため、畦を立てないで直播するのが一般的である。

また、近年では北西部で営まれていた畦を造成して移植するタイプの稲作が南部に伝播している。この背景には、これまで北部に居住していた農牧民スクマの移住が関わっていることも明らかになった。彼らは広大な放牧地を求めてタンザニア南部に移住しており、その移住にともなって移植型の在来稲作が南部へ伝播している。

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.